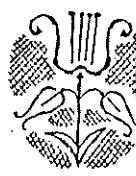


# 勝林寺報

慈光はるかに  
かふらしめ  
法事をうとそのべたもう  
大安慰を帰命せよ



うららかな春の陽さしに、ものみが永い眠りからめざめて、いつせいにいのちのよろこびを歌いはじめます。このご和讃、そのいのちのよろこびの歌として日本のある歌のなかでの絶品だと想います。音調のうえからも万葉のあの歌を思い出します。

「いわばしる垂水のうえのさわらびの もえいする春になりにけるかも」

「慈光」というのは如来さまの慈悲の光といううとですが、むかしから「慈」は父に「悲」は母の愛にいたとえます。「慈光」父は私の身にまといつきはしません。いつもある間隔距離をおいて「はるかな」ところから見つめていてくれます。

そのはるかな遠いむかしから照しててくれた慈光が、いまようやつと私のところに「いた」りとどいたのです。ちょうど陽の光の永いはぐくみのなかで木の芽、草の芽がようやくころぶとのときです。「信の一念」とよばれる、そのときです。そしてそのとき、「信心の歓喜」、不思議ないのちのよろこびをおさえることができません。

このよろこびは、はるかな慈光にめぐまれて、ことにめざめたよろこびです。ですからこの光あかぶらしめ」た如来さまを「歓喜光仏」とたたえます。そしていま歓喜光仏の慈光のなかでぐまれたよろこびは並のよろこびとは違つて「法の喜び」です。

「井乾きて 月をやどさず」

心が渴いていると  
カリカリと なんでも人のことに腹がたつ。

心がみたされていると  
ここから人のことをよろこんであげられる。

旅の楽しきは  
帰るべき家あればなり。

この如来さまの慈光を「歓喜光仏」とよぶのは、とくにこの私の懣意（怒り憎しみのところ）をしつめて、人のことをここからかうこんであげられるここに変えてくださる光であるからです。

私たちは本来人をいつくしむころは持ち合わせません。むしろ人をにくみ人のことに腹を立てるのが私の性です。しかしその憎むことしかしない私が、如来さまの慈光に実は照らされつゝまれていてことを知つたとき、すなわち私のところに慈光がみちみちて自身大きな安らぎと慰めのなかにひたされてしまふ悲しみ悲しみ歓こびが、人ごとでなく同感できたり、共に悲しみ共によろこぶことのできるようになって育てられるのです。

同じ慈光のなかでの「きようだい」のきずながうまれるのです。

如来さまの慈光はこのように、私を歓喜のなかにつつんでくださるだけではなくて、私を「こころから人のことをよろこんであげられる私に育ててくれるのです。親鸞さまは別のところで、この如来の慈光にはこの世にあるこの身が「心多歓喜」（よろこびにみたされ）そのうえに「常行大悲」（いつも人と共にうめき共によろこぶ）身に育ててくださる利益（ちから）があつたのだとよろこびたとえておられます。

楽しいわたしたちの行事日程が決まりました。いまから予定を立て準備をしてください。

春季研修会 ソフト大会 4月 7日  
念仏奉仕団 6月 4・5日

詳しいことは後日仏社・仏婦から連絡をします。

## 四月の二よみ

### 出石組組合

一日

八代光延寺永代經

二日

藤田丈太郎氏宅法事・光延寺永代經

三日

中川信氏宅祥月・報恩講

四日

正勝寺

五日

大日 敦林一男氏宅法事・山田弘丘宅法事

六日

「お花まつり」（雑供会）

七日

中央連研講師研修会（山科別院）

八日

香住町区長同和研修会

九日

玉日会定期例

十日

清水儀一氏宅法事

十一日

香住町区長同和研修会

十二日

清川義一氏宅法事

十三日

十六度会

十四日

福島政夫氏宅法事

十五日

稲葉政夫氏宅法事

十六日

香住町区長同和研修会

十七日

清川義一氏宅法事

十八日

香住町区長同和研修会

十九日

香住町区長同和研修会

二十日

香住町区長同和研修会

二十一日

香住町区長同和研修会

二十二日

香住町区長同和研修会

二十三日

香住町区長同和研修会

二十四日

香住町区長同和研修会

二十五日

香住町区長同和研修会

二十六日

香住町区長同和研修会

二十七日

香住町区長同和研修会

二十八日

香住町区長同和研修会

二十九日

香住町区長同和研修会

三十日

香住町区長同和研修会

一月

香住町区長同和研修会

## 一年生 おめでとう



✿ 門徒現在帳で調べました。もし漏れていましたら至急おしらせください。  
✿ 一年生になりました。  
✿ 明るい子に  
✿ 育ちますように  
✿ おめでとう

✿ 門徒現在帳で調べました。もし漏れていま

ざります。

✿ 寺からお祝いにお珠数と「いちよ

う」を贈ります。

✿

✿

✿

✿

✿

✿

✿

✿

✿

✿

✿

✿

✿

✿

✿

✿

✿

✿

✿

✿

✿

✿

✿

✿

✿

✿

✿

✿

✿

✿

✿

✿

✿

✿

✿

✿

✿



「連研」について  
「連研」とよびます。  
お念仏のご門徒としてのよろこびを共によろこぶ運動の推進者となつていただき、あらためて系統的に二年間十二回の研修をする会がこの「連研」です。  
昭和五十一年から始めていま第五期の「連研」です。勝林寺ご門徒二十四名が出石組の「連研」です。勝林寺ご門徒二十四名が出石組の「連研」を修了。今年「勝林寺法輪会」を結成して今後の研修や活動を期しています。  
いま第五期連研に六名参加。二十代の青年も研修に励んでいます。  
第六期は明年四月から。はや受講者の申込もあります。年齢は六十歳まで。

## 私のお念仏

仮社官鳩千秋



「あつさむさも彼岸まで」とか。  
これからは一段と暖くなり、すべての生物が活動する季節となつてまいりました。

「可能性」というものをもつてゐると思ひます。私たち一人一人がそれそれに「可能性」があるから、明日がありまた希望ももてるのだと思ひます。

しかし、「可能性」はあるとはいうものの、それが実際に「可能」になるかどうかはなんの保証もありません。できるできると思ひながら終りをつけることだつてしばしばあります。実際私はいま、そのことにつきあつてゐるような気がいたしております。あれもこれもしたいと思ひ、しなければならぬと願つていながら、実は何一つそれらしいことができないでいるよう思ひます。それが悩みです。いわゆる「求不得苦」というのでしようか。

過日のお彼岸会にご院家さまから彼岸ということにちなんだお説教を聴聞させていたゞきました。

佛教の原則ともいふべき「中道」のところについて詳しくお話をいたゞきました。いつも自分が欲にとらわれ、我にとらわれおのれの立場に片寄つた生きかたしかできていなかつて、遠いかなたの理想のように思えました。理想に近づかせていたゞくために「ともにこれ凡夫」という互の思いやりのなかでの日々暮らしを少しでも少しだつてもと思ひながら、道はなかなかかけわざい私には、遠いかなたの理想のように思えました。しかしよく思ひます。私にとつて何か都合が悪くなると他人のせいにしたり責任をなすりつけたりあるときには神だのみなどにおちいりがちであります。

春の淡雪<sup>あわや</sup>がとけるようにすべてのものは、あてたよりにならなかつたそこでブツダは「母の角のごとくただ独りして歩め」と教えられる。

あれにこれに目がくらみ、これを信じようかこれにがろうかと迷うのではなくて、「自分と法

だけを依り廻として」ただ黙々とあゆめとのことだらうと思つております。

人とくらべたり他人の口車にのつたり人の力をあてにしたり、とにかく他人を基準にして終には自分をだめにしてしまふからだと思ひます。

私にお与えくださつた今年の「可能性」。それは如来さまに何んでも彼でも聞きとられてしまつてゐ私のこのいのちだけに依つてすすみた

いと思ひます。そしてそのことがとりもなおさず、人の気持ちを聞いてあげられるところとなれることだと思ひます。

まつたくかたよりのないお念仏とともに生活させていただきたいものです。それが「中道」を生きることになるのではないかと思ひます。

南無阿弥陀仏

あてもなく未知の世界へ歩むわれに

み光りはるかいま照します。

【部落解放基本法】制定要求署名のお願い

民主国日本に人のいのちを踏みつけにするようなことがあります。一つ親のよび声お急仏のなかに血すじ家がら身分などの差別があつてはなりません。

こ二十年の間の差別撤廃の国民運動によつて、そとにあらわれた部族差別は次第に克服されつあります。しかし近年、むしろ差別は許されないと知つたうえでの差別、部族差別のことをよく学習したはすの人たちの差別、人の目につかないところでの陰湿な差別事件が頻発しているのはどうしたことでしょうか。

これはもう人ごとではありません。私たち自身のくらしなかの心のなかをよくよく掘りさげみなければなりません。そしてお互いに歯をかけあつて、私たちのくらしなか社会のなかから、差別を追放するねばりつい運動をおこさなければなりません。それがこの「部落解放基本法」制定要求の運動です。

また国連ではすでに「あらゆる形態の人種差別撲滅に関する国際条約」を採択し、国連加盟国の五分の四にあたる百二十四ヶ

国会が批准しており、日本にいまその条約批准が迫られておりま

す。「部落差別解放基本法」はこの世界の大きな願いのなかで制定要求されているのです。

お念仏は、だれもみないつしまよいでとよんぐださる如來さまのおよび声、静土真宗は「四海みなきょうだい」、「御開闢御同行」の社会をめさすおしえです。

静土真宗本願寺派のご門主様はいま「部落解放基本法」制定の先頭に自からすんでお立ちになつています、あなたもこの運動に参加してください。

三月一日 聖林寺仏教年会

ゆめ

むかしむかし二五〇〇年も昔、はるかにヒマラヤの雪の山々が見える北

インドのカピラ城という町に、シャカ族とよばれる人が住んでおりました。

王様は淨飯王、おさき様を摩耶夫人といい、お二人とも大変やさしい立派なたでした。

ある夜のことです。

摩耶夫人は不思議な夢をござになりました。まつ白な大きな象が天から降りてきて

摩耶夫人のおなかに入つたのです。夫人は



といい、お二人とも大変やさしい立派なたでした。

これをおのれにもとめ

小人はこれを人にもとむ

【論語】



した・仙人は「こんな立派な子どもはまだ見たことがない・きっとすばらしい方になられるにちがいない」といつて涙を流してよろこびました。この王子さまはシントルタと名づけられました。されどこのに立派な人」という意味の名でした。それでいて、大変悲しいことがおこります。摩耶夫人が、太子が生れて七日のうちに突然亡くなつてしまわれたのです。

(四月八日は「花まつり」。今月から農原大成先生の「秋の生涯」を転載させていただきます)

（四月八日は「花まつり」。今月から農原大成先生の「秋の生涯」を転載させていただきます）

（四月八日は「花まつり」。今月から農原大成先生の「秋の生涯」を転載させていただきます）

## お駕幸さまの生涯

## 誕生

摩耶夫人は不思議な夢をござりました。学者は申しました。まつ白な大きな象が天から降りてきて

摩耶夫人のおなかに入つたのです。夫人は

「これはこれはおめでたい。やがてすばら

しい男の赤ちゃんがお生れになるにちがい

ありません。」

夢の意味を学者にたずねました。学者は申しました。まつ白な大きな象が天から降りてきて

摩耶夫人のおなかに入つたのです。夫人は

「これはおめでたい。やがてすばら

しい男の赤ちゃんがお生れになるにちがい

ありません。」

その夢から一年たちました。摩耶夫人はお

ともをつれて城の東のルンビニーの森に行

かれました。夫人が、無數<sup>無数</sup>という花の枝に右

手をおかけになつたとき、男の赤ちゃんが生れ

ました。そのとき天から「甘露」つまり「永遠

のいち」といわれる雨が降りそゝいだといわ

れます。赤ちゃんは七歩あるき、右手に天、左手に地を

指して

天<sup>天</sup>下<sup>下</sup>唯我<sup>我</sup>尊<sup>尊</sup>（この天のもとこに地の

うえ、わがいのち尊し）

といいました。このことば通りこの赤ちゃん

が後に尊いお駕幸さまになられるのです。

これは四月八日のことだといわれます。この日

を「花まつり」としてお祝いするのです。

シツタルタ太子

シャカ族のお城カピラ城では王子ご誕生に入々は大よろこびでした。アンダ仙人もその一人で